ニュースレター「がん１１０番」第102号　2023.11.20

NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

● Dr.井上林太郎の書籍紹介

僕はあと何回、満月を見るだろう
坂本 龍一 著　新潮社　2023年6月初版

はじめに
　本書の著者、坂本龍一先生のニックネームは、「教授」である。私も、「教授」と呼ぶことにした。2020年12月、教授68歳の時、大腸がんの再発・転移が見つかった。そして、23年3月逝去。享年71歳。早速、本書の「がんと生きる」より抄出。
　『「ぼくはあと何回、満月を見るだろう」。70 歳の古希を迎えてから、よく思う。この台詞は、映画「シェルタリング・スカイ」(1990年)に出てくる。「ラストエンペラー」(87 年)に続いてぼくが音楽を手掛けた、ベルナルド・ベルトルッチ監督の作品だ。
　映画の最後に、原作者のポール・ボウルズが登場し、ぼそっとこう語る。「人は自分の死を予知できずー／人生を尽きぬ泉だと思う／だがすべての物事は数回　起こるか起こらないか／自分の人生を左右したと思えるほどー／大切な子供の頃の思い出もー／あと何回　心に浮かべるのか／4～5 回　思い出すのがせいぜいだ／あと何回　満月をながめるのか／せいぜい20回／だが人は　無限の機会があると思う」
　実際、ボウルズは映画の完成から10年も経たずにこの世を去るわけだが、「シェルタリング・スカイ」に関わっていた頃、ぼくはまだ 38 歳だった。ボウルズのこの言葉は鮮烈な印象を残したが、必ずしも我がこととして捉えていなかった。でも、2014年に中喉頭がんが発覚してから、自らのモータリティー死についても、自然と考えざるを得なくなった。』
　私井上も術後3年目の、07年6月に受けた胸部CT検査で、結果的には「シロ」だったが、「転移の疑い」の影を指摘された。以来、「死を見つめて生きる」ようになった。「あと何回　満月をながめるのか」、「ぼくはあと何回、満月を見るだろう」。私の心の琴線に触れる。
　そして、再発後、21 年 1 月に受けられた手術は困難をきわめ、20 時間にも及んだ。術後戻ってきた病室で、教授はふと、「ぼくはあと何回、満月を見るだろう」と呟くのをマネージャーは聞いたという。今回は、本書を紹介する。

著者の紹介；坂本龍一（さかもと・りゅういち）

　1952年1月17日、東京生まれ。東京藝術大学大学院修士課程修了。1978年「千のナイフ」でソロデビュー。同年、YMOの結成に参加。1983年に散開後は「音楽図鑑」「BEAUTY」「async」「12」などを発表、革新的なサウンドを追求し続ける姿勢は世界的評価を得た。映画音楽では「戦場のメリークリスマス」で英国アカデミー賞音楽賞、「ラストエンペラー」でアカデミー賞作曲賞受賞。「LIFE」「TIME」をはじめとする舞台作品や、韓国や中国での大規模インスタレーション展示など、アート界への越境も積極的に行った。環境・平和問題への提言も多く、森林保全協会「more trees」を創設。また「東北ユースオーケストラ」を設立して被災地の子供たちの音楽活動を支援した。2023年3月28日死去。

本書の内容・感想
　まず、教授の病について。「手術直前のこと」より引用する。
　『ここで、ぼくの今の病状について説明する。2014 年に発覚した中咽頭がんはその後、晴れて寛解したものの、20 年 6 月にニューヨークで検査を受け、直腸がんと診断された。前回、放射線治療がうまくいったので、ニューヨークの

そのがん・センターのことを信頼していた。今回は、放射線治療と並行して抗がん剤も内服した。

同じ年の12月に日本で仕事があり、その頃、物忘れの多さに悩んでいたので、帰国のついでに脳も調べることにした。11 月中旬から新型コロナウイルスの感染対策のための 2 週間の隔離を経てから、人間ドックを受けた。脳は正常であったが、直腸がんが肝臓やリンパ節に転移しているという。

日本の病院で最初に診た腫瘍内科の医師は、「何もしなければ余命は半年ですね」とはっきりと告げた。加えて、「強い抗がん剤を使い苦しい化学療法を行っても、5 年生存率は 50%」と言う。それは、統計に基づいた客観的な数字なのだろう。有名な先生だと聞いていたが、こちらに希望を与えないような悲観的な断言をされ、その患者に対しての言い方が頭にきて、そして、落ち込んだ。知り合いの医師の紹介で、別の病院へ行った。他臓器に転移があるという時点で、ステージ 4 と認定された。その後の検査で肺への転移も分かった。はっきり言って、絶望的な状態だ。そして、年が明けて21年1月、まずは直腸の原発巣と肝臓2ヶ所、さらにリンパ節転移も取る外科手術を受けた。大腸を30cmも切除するという大掛かりなもので、当初 12 時間ほどを予定していた手術は、結果的に 20 時間もかかった。』

術後も、精力的に音楽活動に取り組まれた。21 年 6 月 18 日から 20 日にかけて、オランダのアムステルダムで、教授らが演出するシアターピース「TIME」の 3 公演が行われた。作品を仕上げていくプロセスに、病室からリモートで参加された。その原動力は。2009 年、57 歳になる頃までの活動をまとめた自伝「音楽は自由にする」を 09 年刊行されている。これに関して、「音楽は自由にする」より抜粋する。

『「音楽は自由にする」というタイトルは、一聴すると、日本語としてどこかしっくりきませんよね。「は」という助詞の使い方がおかしいじゃないか、と感じるかもしれない。ただ、これはドイツのナチス政権がユダヤ人強制収容所の門に掲げた標語「Arbeit macht frei(労働は自由にする)」をもじって、あえて使った表現だ。だから「音楽は自由にする」をドイツ語にすると「Musik macht frei」、英語だと「Music sets you free」ということになる。

背景には、2001 年のアメリカ同時多発テロ事件と、その後の世界の変容があった。もちろんテロリズムは恐ろしいことだ。(中略)しかし、9・11 直後から「テロリスト憎し」でアメリカが帝国主義的に振る舞うようになったことにも、同じくらい危機感を覚えた。そんな、どちらに味方しても武力行使は避けられない状況下で、音楽にも何かできることもあるんじゃないか。当時のそんな素朴な願いを、「音楽は自由にする」というタイトルにはめ込んだ。政治問題に限らず、その後、がんという別の桎梏(しっこく)に囚われてから、この気持ちは一層強くなっている。身体が自由にならなくても、音楽を作ったり聴いたりしているときだけは、痛みも不愉快な思いも忘れられている。「Music sets you free」なのだと、しみじみ感じる。

きっと、月にも音楽と同じ効果がある。以前、京都の桂離宮を訪れたら、庭園内に「月波楼(げっぱろう)」という月を見るためだけに作られた庵があって感動した。きっと江戸時代の貴族たちは、夜になるとここで月を眺めながら、お茶やお酒を嗜んでいたのだろう。今となれば鄙びた建物だけど、縁側がちょうど池に面していて、彼らは水面に映る満月の姿を愛でていたのかもしれない。ぼくたちが音楽に耳を傾けながら心がふっと楽になるのと似たようなことが、月によってもたらされていたのだと思う。』

その後も、教授は活動を続けられ、23 年 1 月 17 日、71 歳の誕生日に、新たなアルバム「12」をリリースされた。「12」より抄出。『アルバムのタイトルは「12」にした。この数字は近年ぼくがこだわり続けてきた「時間」という概念を象徴している。1 年は 12 ケ月ですし、時計のインデックスも 12。さらに東洋には十二支というものもある。(中略)これまで発表してきたオリジナル・アルバムとは異なり、基本的に今作は何か確固たるコンセプトのもと制作されたわけではない。ただ徒然なるままにシンセサイザーやピアノで奏でた音源を 1 枚にまとめたに過ぎず、それ以上のものではない。でも、今の自分には、こうした何も施さない、生のままの音楽が心地よい。それでは、ぼくの話はここで終わりにする。Ars longa, vita brevis.(芸術は永く、人生は短し)』

教授のその後を、盟友・鈴木正文氏が「著者に代わってのあとがき」として書いている。抄出する。

『いわゆる緩和ケアは 3 月 25 日からはじまった。その日の午前中には、坂本さんは、担当した医師ひとりひとりと握

手をして、「本当にお世話になりました。ありがとうございます」と礼を述べた。「もうここまでにしていただいたので、お願いします」と、おだやかな語調でつけくわえて。坂本さんはみずから希望して緩和ケアに踏み込んだ。

さらに、来(きた)るべきときに、つまり、いずれおこなわれる坂本さんの葬儀のときに流されるべき曲目のリスト(フューネラル・リスト)を確認した。すでに前もってつくってあったリスト通りに曲を聴いていくうちに、「あ、この曲はダメだな」というものもあった。緩みない明確な意思が、健在だった。(中略)。

坂本さんは、3 月 28 日の午前 4 時 32 分に息を引き取った。71 年の生涯を終えた。家族のひとりが、でも、人の 3 倍は生きたよね、といった。坂本さんの生きた時間は、71 年だけれども、かれの生きた時間の濃密さからして、享年は 71 ではなく 210 であってもおかしくない、と…。(中略)

坂本さんはすでにいない。ならば、僕たちが「坂本さん」になろう。坂本さんのなかにバッハやドビュッシーやタルコフスキーや武満徹やベルトルッチやドゥルーズやゴダールが宿り、もっといえば、夜明けの日の出をじっと身じろぎもせずに見つめる太古の原始人の言語化しえぬ人間以前の人間の魂が宿ったように、僕たちのなかにも、どこかに、いつかの「坂本さん」が宿っているにちがいない。とすれば、僕たちのなかの「坂本さん」に、(僕たちなりのやりかたで)なることはできるー。そうして、「坂本さん」は、210 年をもこえていきつづけることになるだろう。(2023 年 5 月 15 日)』

もう一度、教授の病気を振り返る。20 年 6 月、拠点にされていたニューヨークで直腸がんが発覚し、再び闘病生活を余儀なくされた。病気を公表されたのは、手術した翌年 1 月で、それまでは近しいスタッフにすら病状を伏せて、密かに月曜から金曜まで週 5 回通院しながら、既に決まっていた仕事を淡々とこなされた。12 月 11 日一時帰国されていた日本で、「何もしなければ余命は半年」と宣言された。翌日にはピアノ・ソロの生配信を控えていた。これまでの人生で経験がないほど自らの死を間近に感じられた最悪の状況ながら、全 15 曲を弾き終えられた。21 年 1 月の最初の手術の後、同年の 10 月と 12 月、2 回に分けて、両肺の転移病巣の摘出手術を受けられている。同時に抗がん剤治療も続けられ、終わりの見えない闘病生活となった。前述したように、アムステルダムでの「TIME」の 3 公演にも病室からリモートで参加するなど、音楽活動も並行して精力的にされている。詳細は本書に譲るとして、「音楽は自由にする」を実践された。そして、本書第 1 章のタイトルは、「がんと戦う」ではなく、「がんと生きる」である。

再発・転移が見つかり、主治医から「もう根治的な治療法はない」と告げられたら、その後の限りのある時間をどのように使うのか。「ぼくはあと何回、満月を見るだろう」と呟きながら、「月」をお題にした辞世の句を思案しながら過ごすのも、「がんと生きる」一つの方法かも知れない。これは単に、今の私の思いだが。

そのような場合を想定し、いかにして自分らしく生きて、生き切るかを予め考えておくことも、賢いがん患者になるためには必要であると思う。本書も参考になる。是非、皆様も読んで頂きたい。

理事　井上　林太郎